

二 青苧と最上紅花

## はしがき

上杉藩下の米沢地方は、江戸末期からの養蚕業の発達以前には青苧・蠟が特産商品であり、山形を中心とする村山地方は青苧・紅花が二大特産物であった。青苧はそれぞれ米沢苧・最上苧とよばれたが、あわせて羽州苧とも称され、江戸時代を通じて会津方面とともに最も主要な生産地帯であった。また村山地方の紅花は最上紅花と称されて、明治以後の化学染料使用以前においては阿波の藍と並んで二大染料として、全国の名声を博したものであった。

青苧・紅花ともに、この地方の農民のもっとも主要な商品作物として農家経済に重要な位置を占め、停滞的孤立的なこの地方経済を全国的市場に連結する媒介の役割を果たしたものである。けれども米沢地方は、江戸全期を通じて上杉藩のゆるぎない支配下にあつて強固な領主的統制のもとにあり、村山地方は積極的な領主の統制支配をなし得ない政治的状況下にあつた。したがって全国的市場への参加の仕方も異なっており、地方経済の発展にも大きな相違が生じたことは否めない。ともあれ、ここでは両地方の青苧と紅花の生産と、流通機構・領主的統制などの点について、概括的な素描をなしてみようとおもう。



青苧畑：現在では大量に植えているところは殆んどない。畑の隅などに植えて自家用の麻糸をとる程度。

## 一 羽州苧の生産概況

苧麻からむしが古代以来、ことに近世の木綿栽培の普及以前においては、最も重要な民衆衣料であつたことは今更いまでもない。そしてこのことは、日本のみならず朝鮮・琉球においても同様であつた。とくに朝鮮においては製織の技法がよく発達し、たんに一般の衣料としてばかりではなく明朝への貢物として、あるいは布貨として中世末まで重要な役割を果していた。

中世の日本において、青苧は自給用として全国あまねく生産されたが、とくに良質の産地として京都を中心とする上方市場に大量に出荷したのは越後を第一とし、丹波・美濃等がこれにつぐものであつた。そしてこれらの青苧座の本所は三条西家で、文明・大永の頃実隆さねたかが座役徴収に苦心したことは、「実隆公記」につぶさに記すところである。しかるに江戸時代にはいと、木綿が大衆衣料として次第に普及するにつれて、青苧は一部の自給的な庶民衣料を除いては武家・町人の礼服用、夏の衣料あるいは蚊帳等の特殊なものに利用されるにとどまつたが、その需要はまだ大きなものがあつた。それらの苧布の地方特産品として名声をはせたものに奈良晒ならじ・越後縮ちぢみがある。さらに越中・加賀・能登・丹波・近江等にもそれぞれ苧布・蚊帳等の特産品があつて、農民経済に重要な地位を占めていた。けれどもこれらの原料である青苧は、一部はその地方産の地苧も使用しているが、主要部分は上州・会津・羽州苧であり、ここにここに取上げる羽州苧が重要な部分を占めていた。羽州苧といつてもその主産地は今日の山形県の南半、すなわち米沢おきたま（置賜）地方・最上地方（今日の山形周辺＝村山地方）である。したがってこれらの地方はたんなる原料生産地で、逆に製品を購入するという、産業的にはいちじるしい後進地方で

あつたわけである。だがそのことはしばらくおいて、苧布の全国的な特産市場における羽州苧の地位をみてみよう。

近世を通じて「南都随一」の産業であつた奈良晒は、江戸中期までは三〇万疋から四〇万疋を生産し、おもに武士あるいは町人の礼服用や夏の衣料に用いられたものである。その原料の青苧は東北地方とくに「出羽・最上・米沢・会津」とされているが、その前三者が羽州苧と総称される米沢最上苧である。奈良晒は享保期を転機として近江麻布・越後縮などに圧倒されて漸次衰退に向つたが、羽州苧は後述のように江戸前期に最も多く出荷されたのは奈良であった。なおこれには、「商人苧と蔵苧の別があつた」といわれるが、これは米沢苧の場合だけである。

越後は古来越布と称する苧布の産地であつたが、中世にはいつてはまた青苧の産地としてもとくに有名であつた。三条西家を本所とする青苧座の管轄のもとに、原料のまま多く京都に送りだしていた。上杉時代になつて越後青苧座の取締を命じられたのは蔵田五郎左衛門で、これは「祖父五郎左衛門以二由緒一」とあるように祖父以来の特権によるものであつた。このように中世においては、もっぱら原料生産地であつた越後が、かえつて他国産の原料苧を買入れ、農家の冬期間の家内手工業によつて、名産越後縮を成立させたのは寛文―延宝―天和の頃である。それは播磨明石藩の人、堀次郎将俊が妻と二女を伴つて北魚沼郡城川村字山谷に永住して、縮の織方を工夫し指導したことに始まるといわれている。その産額は天明年中は年二〇万端にのぼり、幕末嘉永年中になつて全盛期をむかえ、三〇万端に及んでいる。

原料の青苧については、「北越雪譜」に「縮に用ふる紵は奥州・会津・出羽・最上の産を用ふ。白縮はもっぱら会津を用ふ。なかんづく影苧といふもの極品なり。また米沢の撰苧と称するも上品なり。越後の紵商人かの国にい

## 2 青芋と最上紅花

たりて紵をもとめて国に売る」とある。また「十日町織物同業組合史」には、「寛文以前には当地産のものを用ひたのであつて魚沼・頸城一円こそその原産地であつたが、やがて会津・米沢・最上の本場物を争つて購入するようになった」とある。すなわち越後縮の成立以前の寛文頃までは地芋でまにあつたが、越後縮の本格的な成立発展後は地芋のみでは不足をきたしたばかりではなく、品質の点からも会津・羽州（米沢・最上）の本場芋を使用するようになったことがわかる。第1表は明治十六年のものであるが、越後縮の生産における羽州芋の占める位置を知ることができよう。明治十年代になると、羽州地方のみならず青芋生産は全般に衰退に向つた時代なので、最盛期の数量を知り得ないが、なおその位置をしのばしめるものがある。

越中・加賀・能登地方は芋を積んで紵とし、紵のまま奈良その他に移出するとともに、また能登の四ヶ布、礪波郡の五郎丸布、射水・礪波両郡の八溝布や蚊帳などを織つたが、その原料は地芋のほかには上州芋・羽州芋を購入していた。第2表にみられるように、加賀・能登・越中国で使用する芋の半ばは、羽州産のものであつた。以上、奈良・越後・加賀・能登・越中等の原料購入の概観によつて、主要芋布生産地における羽州芋の占める位置を、ほぼ知ることができよう。このように羽州芋は近世にはいつて、各地の芋布生産の興隆に伴つて発展したものであるが、それが原料生産の域にとどまつて製織工業の段階まで十分の進展をなし得なかつたことも、追究されなければならない問題であらう。

第2表 加賀・能登・越中3国の紵出来高

	上州芋	羽州芋	地 芋	計
加賀国	—	90 駄	140 駄	230 駄
能登国	—	200	120	320
越中国	200 駄	550	350	1100
計	200	840	610	1650

（文化10年高岡紵屋仲間の書上、「高岡史料」下巻による）

第1表 明治16年  
購入貫数

会津芋	1,000 貫
米沢芋	3,000
最上芋	8,000

（「十日町織物同業組合史」による）

たりて紵をもとめて国に売る」とある。また「十日町織物同業組合史」には、「寛文以前には当地産のものを用ひ

## 二 米沢芋と縮の生産

**上杉藩の** 江戸時代、上杉藩が最も力を注いで、生産の増加と統制をはかったものは青芋である。米沢(置賜)  
**青芋奨励** 地方の青芋はいつの頃から盛んに栽培されるようになったか明らかでないが、天正十八年、入部し

た蒲生氏もすでに注目している。文禄四年の編とみられる「邑鑑」に、御役植物として紅花・楮等とともに青芋生産の有無を調査している。これによると、置賜における青芋産地は江戸時代を通じてほぼ変化はなく、最上川上流兩岸の山麓地帯、すなわち下長井郡東通・西通が主で、他は北条郷にわずかある程度である。

蒲生氏について慶長三年入部した上杉氏は、この地方の農民経済に占める青芋の重要性に留意し、一層積極的に生産の指導奨励にのりだしている。「四季農戒書」(地下人上下共身持之書)は、上杉景勝の家老直江山城守兼続が領内農民に、正月から十二月にいたるおもな農事とその心掛をとききとしたものである。その中には青芋についてふれたところが多く、大いに重視していたことが知られる。正月の項には「娘女房は糸を取、芋をひねり男子共の著類をかせぐべし」とあり、衣類の自給は冬季農閑期の女子の仕事であったことを示している。また七月の項には「からむしを取べき也。からむしはわつかのよしに候。只今はからむしを以地下人よろづを調也。能々案知見るに田に出来る米にはまきりたり。いかには是をおろそかにせんや」とあって、当時すでに青芋が農民経済にとって貨幣経済に対応するための商品作物として、重要な位置を占めるものであることは支配者側もよくみとめていたところである。むしろこの地方においては、青芋を除いては他に有力な商品作物はなかったのである。半石半永制をとった領主側は、貢納確保のためにもその奨励は必要であつた。のみならず、この商品生産を領主

経済のために直接掌握しようとして現物貢租を課したのは、早く近世初頭からである。この所納の青芋を上方市場に一手販売した特権御用商人は、西村久左衛門である。その間の事情について「西村家由緒書」は、次のように述べている。西村家の祖助左衛門成久（浄久）は近江今在家安土の住人で、信長の家臣であった。信長の滅亡後浪人となったが、その弟次右衛門と成久の子成安は蒲生氏郷に仕え、天正十八年氏郷の会津転封に従つて奥州に下り、米沢に住した。慶長三年蒲生氏の宇都宮移封後も米沢にとどまり、上杉景勝の入部を迎えて先方衆として再び奉公して、上方との連絡をもつところから上杉藩の御用達を勤めることとなった。成安は京都にあつて藩用を弁じ、その弟如信は証人として、米沢に住して京都との連絡にあたることとなった。関ヶ原役後一二〇万石から四分の一の三〇万石に縮小した上杉家では、財政難緩和の必要から西村家の「青芋を為二御登一被」成京都二而売払候ハ御徳用可レ有レ之」という申立を採用し、国産品としての青芋の領主販売を始めたのである。慶長八・九年の頃は漸く一〇駄内外であつたが、その後だんだん駄数も多くなり、「其代銀二而京都御用物御調勝手能」<sup>レ</sup>くなつたという。

**貢納と** 青芋の現物貢租を課するため、青芋畑の検地をやつた最初は明らかでないが、すでに寛永十五年の検地帳には「からむし畑」とある。さらに厳密な検地を施行して、貢納額を規定したのは慶安四年である。上畑一反に付二貫八百匁、中畑は二貫六百匁でこれを御所納芋、或は畑芋（畝芋）などと称した。その貢租の余剰分を、相場芋或は御買芋（商人芋）などと称して一反につき五貫二百匁と定め、「少々成共脇売堅く御法度」として他商人への自由販売を禁止し、藩が買上げる制度であつた。御所納芋・御買芋合せて一反に付八貫目であり、そのほかなお余分があれば「御定の外にも御蔵納致」すこととなつており、完全な領主専売を励行しようとするものであつた。けれども慶安四年から一挙にこのように厳重に施行されたかどうかは疑問である。「笹野通夜

物語」に「青苧御役は慶安四年御検地、畑壹反二付八貫匁積とは承応三年のからむしの出高を以て被二仰渡一明暦年中より定納に相成候」とあるように、明暦三年は上杉藩が一切の貢租体系を整備した年であるから、おそらくはその一つとして青苧の貢納額も確定されたのではないかと考えられる。このような領主販売を実施した藩の背後には、西村家の策動があったことも見のがしえない。「青苧一件奏議」によると、御所納苧すなわち蔵苧は西村家が扱ったが、貢租外の余剰分を扱う商人苧が多くなったので蔵苧を払うのが不勝手になった。そこで西村家は藩庁に申立て、藩の買上資本は西村家が融通すること、藩が領内商人をして商人苧を買取らせて蔵苧と同様に奈良に上せるというもので、領内青苧を西村家が一手に売りさばこうとするものであった。したがって、こうした事情の上に設定されたとみられる明暦年中から相場苧（商人苧）の定納制は、まさに領主経済とその権力に依存する特権的御用商人の提携の典型的なものであった。しかも「荷造繩・孤・御役人の薪迄百姓より差上申事」になっており、これがまた百姓にとってかなりの負担であった。さらに不作・違作・根失などのため、定納分に不足のものは「買弁」しなければならないのであった。

**米沢苧** 上杉領内のいわゆる米沢苧の総産額は、享保十三年頃で「からむし都合五百三十拾駄余り年々御買上被の産地 二仰付一候。外に商人苧数百駄の出役……」（『笹野通夜物語』）とあるように、蔵苧が五百駄余、商人

苧が数百駄、合せて約千駄内外であったと推定される。文化十年の資料（元置賜村反別）によつて郡別の産額を示すと第3表の通りである。

下長井東通りが最も多く、これにつぐのが下長井西通りで、最上川上流兩岸の山麓地帯が第一の産地であった。下長井東通りに続く東方の北条郷地方は、後述の青苧騒動にみられるように、宝暦頃からようやく盛んになりはじめたもので産額は少い。こうしてみると、米沢苧の産地は上杉領の北西半に片寄っており、いちじるしい地域



## 2 青芋と最上紅花

第3表 郡別青芋産額 (文化10)

	上長井 郡 (45ヵ村)	北条郷 (54ヵ村)	中 郡 (17ヵ村)	小 国 郷 外 中津川 (69ヵ村)	中津川 (14ヵ村)	下長井郡 西 通 (25ヵ村)	下長井郡 東 通 (26ヵ村)	計
畑 芋 (畝 芋)	なし	買 欠 401.120	買 欠 .340	なし	なし	買 欠 2083.980	買 欠 4623.110	買 欠 7109.500
相場芋	なし	600.400	.550	なし	なし	3679.880	8283.270	12564.100
計	なし	1001.520	.890	なし	なし	5763.860	12907.380	19673.650

的特色をしめしている。小国郷や内・外中津川は山村でありながら、定納を指定されないほど微小なものであったことは注目される点である。なお米沢芋のうち上物とされたのは、大塚村と屋代村から産したものであった。大塚村では最初は越後松之山の太塚原から根分けしたものと伝えられている。屋代村はのち天領となったので、ここから産したものは御領芋の名があり、羽州芋のうち最良品とされていた。

### 輸送と販売

次に米沢芋の販売輸送の問題であるが、まず梱包は一貫二〇〇匁を一連とし、三二連すなわち三七貫二〇〇匁をもつて一駄とする。

西村家の一手販売の時代はいうまでもなく、その後も多くは奈良に販売されたわけ、その輸送路は江戸廻りと北国廻りの二路があった。江戸廻りは、米沢から陸送して江戸に至り、江戸から船積みして海路大坂に着け、大坂から川積みで淀川をのぼり伏見に至る。さらに木津川に陸揚げし、奈良に陸送するコースであった。また北国廻りは米沢から宮（現長井市）まで陸送して、そこから最上川上流を川積みして下り、左沢で揚げて大石田まで陸送する。大石田から再び最上川積みして酒田に至る。酒田から海路によって敦賀に揚げ、山中新道野・塩津を経て大津に至り、さらに伏見・木津を経て奈良に至るのである。「諸役場根元記」によると、蔵芋五〇〇駄余のうち四〇〇駄余は江戸廻りで、残りの一〇〇駄余が北国廻りであって、米沢藩では上方為登の多くは江戸廻りを利用したことが知られる。



紅花船の港入り：沖から何十という屋号のついた  
白帆が灯台と荷蔵の立並ぶ港に入ってくる  
(青山永耕画「紅花屏風」〔文久年間〕寒河江市武田健  
氏蔵より)

江戸では大坂屋久兵衛が支配し、大坂では道頓堀の唐金屋庄左衛門、奈良では大黒屋六右衛門支配で、奈良の青芋商人へ入札販売するという順序であった。入札は、年四度に行われたようである。荷造運送については、荷造用の縄・菰・役人の薪木・荷造人足等すべて百姓へ役としてかかるばかりでなく、運搬人足・宰領まで百姓負担であった。したがって百姓側には、大いにこれを不満とする声が強かった。

京都の西村家は東洞院四条上ル町に店を構えて、青芋のほか蠟・蠟燭・紅花等上杉藩内の国産品を引請けて繁昌した。しかし元禄頃から、米穀輸送のため最上川上流の船路開発工事に莫大な投資をして以来すっかり家産を傾け、

その後やがて身上を潰してしまった。その後奈良晒の衰退と反対に、越後縮の隆盛という状況の変化もあってか、販売機構が大きく変った。その間の変遷の事情は、資料上の制約のため経過が明確でないが、蔵納の貢租分を除いては自由販売が認められている。この一部自由販売制の許可と、西村家の貢租米輸送のための船路開発とは無関係でないものが感得される。また自由販売制を申し立てたものが寺嶋代官であるところに、その背後には領内百姓、ことに領内地方商人層の西村家独占に対する不満と策動もうかがわれるものがある。そして自由販売分の商人物は、多く越後に向けられるようになったことも注目すべき変化である。藩の正式の認可を得た撰芋小宿と

称する在方の集荷商人が買集めて、越後青芋商人と直接取引をしたようである。撰芋小宿の、在々における配置は次のようである。

①宮内村茂兵衛、②同村木下金四郎、③同村源六、④漆山村源六、⑤梨郷村与四郎、⑥同村松木与左衛門、⑦上小松村加藤庄吉、⑧中小松村船山清蔵、⑨同村万蔵、⑩同村井上庄右衛門、⑪同村金子伝五郎、⑫小出村川崎平右衛門、⑬同村横沢忠兵衛、⑭同村竹田五郎次、⑮同村渋谷名右衛門、⑯宮村忠助、⑰同村惣左衛門、⑱同村弥六、⑲同村喜内、⑳成田村佐々木義蔵、㉑中伊佐沢村小林兵内、㉒石那田村山口仁三郎、㉓同山川善八、㉔馬場村孝助、㉕同村孫兵衛、㉖同村卯右衛門、㉗同村舟山佐助、㉘畔藤村丹次郎、㉙鮎貝村岡部小次郎、㉚同村菅佐助、㉛小萩村川合伊兵衛、㉜赤湯村信七、㉝中山村佐藤孫七

以上の三三名でいずれも下長井郡・北条郷に属し、ことに下長井郡にあつて青芋集散の中心地であつた長井（小出・宮）には、八名が集中しているのが注目される。

**検断と** 領外出荷品に対しては、出役銭が課されたことは藩政時代一般の例であるが、青芋に対しては三七貫  
**出役銭** 二〇〇匁入一駄に対し三八匁で、撰芋には別に一駄に付四五匁五分が課された（宝暦年中——米沢商業

記録による）。文化九年中出入役銭改所に納まった青芋・紅花役銭は、一二九二両三分と四四貫七二六文であつた。米沢領における紅花生産高は極めて微々たるものであつたから、このほとんど九割どころは青芋出役銭とみられる。なおこれは、この年の出入役銭中最高位を占め、総額五一・四両余の五分の一以上を占めている。青芋が米沢藩内国産品中最も重要なものであつたことは、この点からも理解される。

米沢東町の検断石田名助家は、代々青芋・紅花問屋役であつた。米沢通過の荷物に対し通手形を発行し、また商人物、蔵物の別なく一駄三文ずつの庭銭を徴収した。商人物に対してはさらに同じく三文の荷込銭を徴収し、馬・人夫を手配するとともに、その駄賃を収納する役であつた。「石田名助記録」によると、宝暦二年度の「御蔵

青芋」「御買立青芋」の米沢通過分（江戸廻り分）は四三二駄であり、また翌宝暦三年度は四〇三駄であった。天明四年になると、「御蔵青芋」は一〇〇駄に減じている。一方には、在方荷主から越後への通過荷物に対する役銀徴収の記事も散見しているところからみて、奈良送りが漸次減少していくにつれ、越後送りが増していく傾向が察せられる。またこの記録には、「御蔵青芋」と「御買立青芋」の外に商人荷物の記事もみえ、在方荷主の活動のようすも察せられるものがある。

#### 北条郷青

#### 芋騒動

農民の商品生産を領主経済に練りこむ専売制が、上杉藩においては近世初頭から強行されたという。生産者的な商品市場の形成以前に、領主経済の立場から農民の商品生産が要求され、藩のリードのもとに推進されてきたことが第一に青芋経済を規定づけている。また半石半永制のため農民自身貨幣の取得を強く要求したところから、地方市場の未熟なままに全国的市場に参加せざるを得なかったことが藩をしてリードをとらせた、否特権的豪商に生産を掌握させた理由の第二点がある。けれども青芋の生産はしだいに発展し、また特権豪商的領主経済のからくりの一端を知るに及んで、農民ないしは領内在方商人の抵抗が増大したことはみのがせない点である。西村家の蔵芋・商人芋の独占販売権がくずれたことは、その一つの現われであるとみられる。また寛文六年の「信夫目安」と称されるものの提訴運動も同様である。さらにここに取上げる北条郷の青芋騒動は、事の起りは森平右衛門の苛政に対するものであるとはいえ、藩の青芋現物貢租徴収に直接反抗するものであった点において、注目すべき事件である。森平右衛門は一人扶持二石の御側役の微身から二五〇石取りの郡代所頭取兼小姓頭に栄進し、藩主重定の寵をもつぱらにするとともに、家老たちを手中になつて藩政を牛耳っていた。貢租専売等の財政事務から、訴訟・刑罰等の主要政務は殆んど彼の意のままになる状態であった。宝暦十年に森は、

赤湯村の佐藤平次兵衛の言をいれて、当時漸く盛んになりつつあった北条郷の青芋に、課税しようとしたのである。前述のように、近世初頭以来青芋役を課されていたのは、下長井郡だけであった。新課税を強制された北条郷内では、一ヵ村の肝煎が先達となり、三五四人の百姓連印をもって「御役芋上納仕申候ては百姓間に合申さざる儀に御座候間御用捨下され度願上げ申奉り候。御憐愍を以百姓打続申様に成し下され度候。若し左様に成し下されず候ハバ青芋根ほりたおし申方に願上げ奉り申候」と嘆願書を提出したことにこの事件ははじまる。一人の肝煎は西落合村四郎兵衛・宮崎村太左衛門・宮内村鈴木与十郎（郷士、馬上苗字帯刀免許）・中落合村清右衛門・長瀬村勘左衛門・法師柳村弥次兵衛・露橋村安右衛門・高梨村庄右衛門・関根村安左衛門・萩生田村忠左衛門らと外一名（処罰されないのので村氏名不詳）で、西落合の四郎兵衛が代表者であった。これに同調した代官小島次左衛門・木村六右衛門・斎藤甚兵衛らも、何れも森の激怒をかった。ことに小島（苗字断絶、刀大小取上、妻里元返し）・木村（家財取上、其身妻子共城下払い）・四郎兵衛（欠所、妻子入牢、其身遠流）・太左衛門（前同断）・西落合文次郎（前同断）らが重罪に処され、他はそれぞれ過料に処された。森の政策は、権力的重圧的態度で貢租の増徴を計り、藩財政の窮乏を建てなおそうとする伝統的方針をいつそう強化すると共に、新設の郡代所に町人中村庄兵衛、江戸の金主野挽甚兵衛らを詰めさせて、商業資本との結託を緊密化して領主経済の拡充を策するものであった。それは未熟な、停滞性のなかにも商品生産を漸進せしめつつある生産者、ないしはその基盤に成長しようとする在郷屋豪農層の利益とは、真向から対立するものであった。ここに肝煎層を先頭に、在地性の濃厚な世襲的代官の同調を得て、農民が生産ボーイコットを武器として抵抗する事件を惹起せしめたのである。この事件の結末は、その後の上杉藩の寛政期の改革に発展する政治的事件であるが、それはともかくとして、宝暦期における青芋生産の一断面を示すものとして留意すべき事件であった。

**青芋小** 文化三年、米沢領の商人舟山孝七・遠藤孫右衛門の兩人が御仲之間年寄服部正相を通じて、領内青芋宿一件 売買の独占を願ひ出た。すなわち従来の小宿売りを停止して、兩人が領内青芋を買占め、越後に一手

販売するよう委任されたいというものであった。そうすれば、兩人は出役錢（毎年一千兩を越していた）のほか、さらに毎年一千兩の運上金を献上しようという条件であった。当時の米沢藩は鷹山の治下（隠居後）で、竹俣当網・荳戸善政らの改革政治が行なわれ、藩財政は一応の確立はみたものの、依然として家臣からの借上分に対する返却は困難な状態にあった。そこで服部は、この運上金をそっくり江戸の豪商三谷に預入れておけば、数年後には巨額になって家中諸士への返済に廻せるという理由で、督学神保綱忠・小姓頭須田満丈らの同志と謀つて、舟山・遠藤の独占案を支持し主張した。これに反対したのは荳戸政以（善政の子）で、ここに両派の大評議となつてなかなか結論がでず、翌文化四年秋まで青芋売払いが停滞するという事態に陥つた。これは藩政担当の上層部間の論争のみならず、小宿・生産者の反対策動も当然あつたことと思われるが、それらの史料は今のところ見当らない。しかし幸いに越後の方の縮生産農民の動きが、黒沼郡二七カ村庄屋の嘆願書によつて知られる。青芋生産地における舟山・遠藤の独占買占権の獲得は、売捌地である越後十日町・小千谷の独占売捌権と相提携したものであつた。小千谷の半左衛門、十日町の藤左衛門兩人が舟山・遠藤に呼応して越後における小商人の売捌を停止し、原料芋の独占販売権を得ようと策謀したのである。このため魚沼郡二七カ村の庄屋は、青芋商人・縮生産者の利益を代表して立上り、これに反対する理由として次のような事情をあげている。

- 1、これまでの数百人の芋商人が家職を失うに至ること。
- 2、占買占売を実施すれば連年値段が引上げられ、反対に品質が低下することは歴然である。
- 3、従来のように困窮の縮生産者は原料芋代を翌年の縮売捌期まで借受けたり、不良原料芋の取替などできなくなり、きわめて不利・不自由に陥る。

さらにこの青苧仕入転法のため、今秋の苧買入が四十余日遅滞し、二七カ村としては四千五百反余、金額にして二千五百両余も取入不足となった。当郡百姓は年越も難儀となり、これまで縮織稼で年貢上納並びに作夫喰さくふじきを求めて渡世してきたが、それも今後は非常な困難に陥る。なにとぞ半左衛門・藤右衛門の独占販売権を禁止して、従来の仕法通りにしてもらいたいのであった。一方米沢の方でも両派の論争が激しく、議を決しかね、ついに藩主鷹山の裁断を仰ぐこととなった。鷹山の裁断は「青苧には一定の出役銭があるのに、その外に壱千両の運上を致すというが、そうすれば畑前から安く買い越後へは高く売り、その利益を彼ら二人が壟断することは歴然である。いま藩の利益のために古法を改めるなら畑前の者共、小宿共、又買人も激昂して騒擾も起るであろう。よって独占を禁止する」というのであった。舟山・遠藤の兩人に加担した須田以下は左遷、隠居閉門、出勤停止等それぞれ処分されて、一年余にわたる策動も終熄した。この一件を通してみても、封建的危機に処する鷹山政策の根本をみる事ができよう。藩益のために重圧を加えてその結果かえって農村荒廃をきたし、それがさらに藩財政を窮乏されるという悪循環に陥っていたのがこれまでの藩政であった。鷹山とその賢宰荳戸善政以下の政策は、まず農村復興であり、それには生産人口の確保、殖産興業以下鄉村支配体制の整備にいたる一連の政策をもって、貢納の確保―藩財政の再建をはかるというものであった。特権豪商との提携というも、その根本策の枠内での一時的、ないしは殖産興業上の便宜的なものであったとみられる。ともあれこの事件は、青苧の流通にからむ独占的特権商業資本と生産者、および在方小商人との対抗を示すものであったといえよう。

### 米沢縮織生 産の起源

米沢地方は、これまで全く原料生産のみで、自給用の地織のほか市場向けの織物生産は殆んどおとなくその製品化にまで進められなければならない。鷹山や家老の竹俣当綱は早くこの点に注目していたが、ちよ

うどそのころ小出村（長井市）の肝煎横沢忠兵衛は越後松之山から縮師を招くことを献策した。横沢は小出村の肝煎であつたばかりでなく、撰苧小宿として下長井郡の中心部小出村にあつて青苧の生産と集荷販売に直接たずさわつていた。米沢縮が、このような立場にあつた横沢の献策と努力によつたものであることは、重要視されなければならぬ点であらう。

安永五年、扶持方の小倉伝右衛門と横沢は、藩命をうけて越後松之山に赴き、源右衛門一家ほか合せて縮師五人を招いてきた。そして米沢の北寺町枳蔵屋敷を工場として、いわば藩営マニユファクチュアを経営した。績み方・紡ぎ方・晒し方・解き方・機方等の分業で、他に賄方・元方（会計事務）・御用係・御附横目・役人・下役・女中頭等があつてそれぞれ分掌した。この縮役場は安永五年から天明七年までの約一〇年間、織工の養成・伝習を活発にしたので、米沢領内における縮生産も次第に向上しはじめた。ことに横沢らの努力によつて、下長井郡方面に早くひろまつていった。安永六年五月中までの「織布反数書出の覚」には、「一、二百八十一反 高。内百九十七反 寺町にて織出す。八十四反 下長井織出 忠兵衛」とあるところからみると、横沢は藩営縮役場とは別に織出していたようである。このように草創期はきわめて幼弱なものであつたが、縮問屋も指定され、また絹糸との交織等の技術も進んで、後年の米沢織の濫觴をなしたものである。

### 三 最上苧

村山地方における青苧の生産地帯は、白鷹山塊周辺諸村（その南西部は米沢苧の産出地帯である）と出羽丘陵東麓の宮宿・左沢・七軒・大谷・谷地方が主であつた。また奥羽山脈西麓地帯の山村は、何れも多少は産した。



## 2 青芋と最上紅花

この地方においても、青芋は近世初頭以来御役作物の第一であった。山形領においては、寛永年中保科肥後守の時代に青芋畑の検地を行ない、一反につき三五〇文の役銭を徴している。その後松平下総守時代に、増加分に対して反当り三〇〇文を課している。幕領においては何年から施行したか明らかではないが、一反につき永七五文の役銭で、何れも一度検地登録の後には「青芋枯くさり等出来」ても、「御役銭の義は前々御引付之通御減銭不<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>仰付<sub>一</sub>」是迄年々上納しなければならなかった。この村山地方は幕領・左沢領・山形領・上山領・柏倉領・長瀬領・新庄領等に細分されているので、総産額を推定することは困難である。これらの上方への出荷は、何れも大石田川港から最上川を下したのであるが、大石田において役銭を徴収した。役銭は時代によって変化があり、寛文六年には三八貫一駄につき銀七匁、明和二年には三六貫一駄につき金一分と銀一二匁八分であり、文化六年になると三二貫一駄となつて永七八文と一分であった。元禄五年以降数年間の、山形領からの他国出青芋・紅花の出荷数・徴収役銭は第4表のようであった。これをもって、村山地方の総産額とはもちろんみられないが、一応の見通しはつけよう。山形領における青芋の領外移出額は八〇〇駄から一一〇〇駄に及ん

第4表 青芋・紅花の出荷数・徴収役銭

年代	元禄5	元禄6	元禄7(8年?)	元禄8(9年?)	元禄10	元禄11
役銭額	138両3分 195貫129文	291両1分 556貫498文	386両2分 459貫190文	381両 525貫212文	332両 561貫779文	463両3分 352文
紅花						
役銭	10両955文	28両1分 370文	177両1分 870文	175両1分 103文	159両3分 325文	(紅・青計) 220両 銀15匁4分2厘
駄数	27駄9貫200匁	342駄 7貫200匁	473駄 12貫	467駄 12貫	439駄 500匁	306駄 308貫800匁
青芋						
役銭	129両3分 880文	172両653文	207両 734文	208両 77貫	168両1分 銀9分	(紅・青計)
駄数	(不明)	861駄	1036駄 76貫600匁	1041駄	841駄 15貫	1091駄 376貫

(「山形経済志料」による。煙草以下の品目については省略した)

であり、紅花のほぼ二倍になっている。山形領内は後述のように、いわゆる最上紅花の特産地帯であるが、元禄頃まではまだ青苧が第一の国産であったことがわかる。

村山地方は、米沢藩とちがつて各藩領に細分化され、また入組状態になっているので、統制専売が困難であったためか、幕末になつて僅かに実施された左沢藩を除いては、青苧についての専売制はみられない。したがつて有力な豪商がそれぞれの商圈を支配して、大規模な集荷販売網を確立していた。その一例として、白鷹山塊の北よりのほぼ中央部の谷合の集落、大蕨村（山辺町）に本拠をかまえた稲村家の概況をみて、当地方の豪商の経営形態をうかがつてみよう。大蕨村は、とりたてて青苧の特産地とはいえない平凡な山村である。明治五年の「年中産物大凡積取調書上帳」によると、青苧はわずかに五駄だけである。この大蕨村に、青苧の豪商稲村家が成長させたのは、今日とは全く異なる交通路と、その要衝をしめる位置であろう。南・東の村山郡から西方の最上川峡谷の西村山郡に通じ、また置賜北部へも容易に通じる道を持ち、ことに最上川船運の点からみれば村山一帯の特産物を掌握するには至便の位置を占めていたといひ得る。稲村家は、青苧・絹糸・紅花・漆・蠟・大豆・米等の地方産物を手広く集荷して上方市場に出荷する在方荷主であり、また帰り荷として塩・砂糖・海産物・茶・繰綿・古手などを下して卸売りする大問屋であつた。元禄頃から営業を始めているが、最も活発に活動するのは享保元

第5表 稲村家の青苧出荷数

年代	青苧駄数
宝暦3	8駄余
4	10余
5	4余
天明5	25
6	18
寛政6	35
7	15
8	19余
10	84
11	127余
12	62余

残在仕切を集計したもので、一部分とみられる

文以降で、幕末になると新たな流通機構の形成下に衰退していく。積荷のうち最も多いのは青苧で、現存する仕切によつてその一端がうかがわれる。

その集荷方法であるが、各産地に下買いの小商人がいて買集めるが、その関係は宝暦以前はいわば手

代やうのもので、稲村から前金を渡され、後に集荷額を差引決済して手数料をもらう組織であつた。それが宝暦以降寛政期に入ると下買小商人は多く仲買として独立し、稲村からの金融に依存する面も大きいが、一部は自己資本によつて独立した機能をもつてくる。稲村は、それらの仲買の集荷品を大量にまとめて出荷する大荷主（買次問屋）として成長してくる。中には仲買から独立して自ら荷主として活躍する大谷村の鈴木清助や、山形の村居清七のような豪商も輩出してくる。稲村の出荷先はもちろん上府（奈良）で、その地の買次問屋へ委託販売するものであつた。もつとも幕末になると、越後や越中へも出荷している。

村山地方の特産物は、このような大規模な豪農問屋たちの支配下に、全国の流通市場に組込まれて発展したのであるが、幕末になつて青芋の主要産地である最上川峡谷一帯を占める左沢藩が、専売制を実施している。

左沢酒井藩は、文政三年に加州高岡の宝屋弥三右衛門に領内青芋の専売権を委託したが、その買付についての条件は次のようであつた。

一、年々時の相場をもつて買受けること。

二、代金は青芋と為替に致し、少しも遅滞しないこと。

三、前金を望む者があれば貸渡すこと。

四、仲買人は、決して他領商人に売渡すような私曲はなさないこと。

もちろん無役にて他越をするものがあれば、嚴罰に処するといふものであつた。特権商人宝屋と藩の契約はどのようなものであつたかは明瞭でない。藩は専売制施行の理由を、農民の自由販売にまかしておくで代金が滞つて農民自身が迷惑すること、或いは生産過剰のため売先がなく困ることがある。そうした不安のないように「小前一助とも相成」るように実施したのであると農民に説得している。そうした事情も一部にはなくはないであろうが、専売制の実施は生産者の利益を損うものであつたことは必然で、百姓は他領商人への密売をもつて対抗し

ている。文政九年の覚書によると、藩はそれを取締るため、次のようなことを達している。「近年最寄くより、別して中買之者相廻り、隠し売これ有り、或は他領切手を以て御領内芋を出し、又は間道を通し候由相聞え候。……当年より左沢町より放し中買出申さず、市場に於て売買致候様仰せ付けられ……其上折々隠目付のもの相廻候。……大庄屋名主は大概一村の青芋出高をも存すべき事に候間、片附候程相改め、序を以て役所へ申し出づべく候」。左沢藩の専売制も、生産者の大きな抵抗が背後にあつたことを示している。

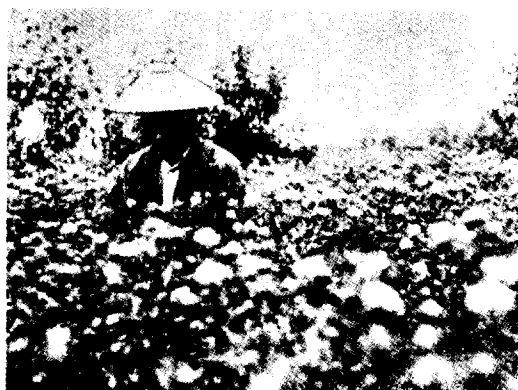
## 四 最上紅花

**紅花生産と** 紅花は、古くから藍・茜・紫根・刈安などとともに、染料植物として最も代表的なものであつた。**農家経済** ことに「くれない」の鮮麗高貴な色調をもつ紅花は、京染には欠くことのできないものであつた。

紅花は肥後・伯耆・尾張・遠江・武蔵・福島・三春・仙台・出羽等全国的に産したが、品質と数量において全国第一位を占めたのは、今日の山形周辺すなわち村山地方である。これを村山地方の古名によつて、最上紅花と称する。山形（村山）盆地の畑作地帯における商品作物の第一として、農家経済ひいては江戸中期以降の経済的發展に、最も重要な意義をもつたのが紅花であつた。明治八年といえ、紅花が化学染料におされて衰退する直前であるが、その頃においてなお山形地方に外部から入る収益年額三〇万円の三分の一は、紅花と推定されている。江戸中期以降の全盛期においては、その比重はさらに大きなものであつたろうと想像される。この地方の産額は、俗に「最上千駄」と称されたように年一千駄前後で、多い年は千四、五百駄まで出している。元禄期からことに盛んになり、寛政―文化以降最盛期を現出したが、明治十年以後は急激に衰退していく。「大町念仏講帳」（西村

二〇〇駄、文久頃は山形八〇〇駄、谷地尾花沢七五〇駄の計一五五〇駄となっている。それが明治十二年になると、出荷品の第一は米で、菜種・藍・青苧・煙草がこれにつき、紅花はわずかに痕跡をとどめるばかりとなっている。

村山地方においては、いずれの村方も「当村畑方作、花・大豆・たばこ作申候」とか、「畑方夏作紅花、秋作麦、其外大豆煙草仕付申候」などと明細帳に記しているように、多少は産した。だがとくに氣候・土性の上から良品を多量に産出したのは平野部の畑方のうち、最上川各支流の沿岸地帯である。前述の豪商稲村家の若い当主のた



紅花つみ：花は朝露のあるうちに摘む。それは紅の上りが良いことによる。昔から花摘みは手の皮の厚くなった老人たちの仕事であった。

山郡河北町谷地）に記載された産額を抽記すると、次のようである。

享保十年 最上紅花都合四百駄。内四十駄ハ谷地出申候。

享保十二年 紅花やち中にて大方出高七拾八駄ほど。山形三百駄ほど

有之由。

享保二十年 当地百貳拾駄程。山形仙台合五百四五十駄程。

元文二年 紅花駄数……近年無レ之谷地花多く出申候。千貳百駄余出

米仕候。

宝暦五年 凡最上紅花千百駄程酒田着申候由。

寛政十二年 紅花当駄数千四百駄余。誠ニ前代ニ覚無レ之事ニ御座候。

最上紅花は、江戸へ出荷した一部分を除いては殆んどが京都送りで、大石田から最上川を下したのであるが、大石田における荷役錢徴収からおおよその産額は推定できる。宝永頃は一一〇〇駄、明和七年は不作で七〇〇駄、寛政八年は一



べ に 一 覧 (「教草」より)

めに、山形の紅花商村居新六郎が商法の手ほどきとして記した「微量骨算」には、紅花産地を次のように記している。「山形は北口に付山形より宝沢・高湯・上野・上平・五めう辺より長崎・谷地・小松沢・長瀬・此外天童近辺……」と、すなわち今日の南村山郡北部・東村山郡・北村山郡南部・西村山郡東部で、村山盆地の中心部一帯がそれである。そして紅花荷主の豪商が集中し、したがって集荷の中心をなしたのは山形をはじめとし、谷地・天童・楯岡・寒河江等の町場であった。

紅花一駄とは、干花にして多くは三二貫であるが、大石田積

第6表 紅花の売上代

	摘 花	金額
	(生花) 匁 匁	両 分
文久 2	69.530	21.2
3	66.330	—
元治 元	63.700	—
慶応 元	77.850	27.
2	(記入なし)	—
3	—	33.
	(干花)	—
4	7.	11.
明治 2	9.800	38.1
3	5.700	17.2
4	6.500	27.
5	—	22.3
6	6.200	18.1
7	—	—
8	6.100	—
9	—	—

出役銭の規定によると寛文九年には三〇貫、明和二年には三二貫、文化六年には三六貫を一駄としている。一駄の値段は年により変動が大きく、普通は三、四〇両から五、六〇両前後であるが、享保四年には八〇両にまでなっている。生産者は干花にして、或いは生花のまま仲買に売払う。生花で売るか干花にして売るか、その日の相場や作業上の都合によるものとみられ、

時代や技術による変化をみることは困難と思われる。紅花は、青芋よりも耕作に手数や技術が必要としただけ値段も高価であり、それだけ農家経済にとっての比重は大きかった。いま一例として、成生村大清水（現天童市）の細矢藤四郎家の紅花生産をとりあげてみよう。細矢家は、安政六年の持高は二四石七斗六升で、田畑合せ二町歩余の自作精農である。「百姓働き物見俵覚帳」は、細矢家の文久二年から明治九年に及ぶ一五年間の田畑の収穫と一部時価相場を記したもので、中農経営の実態を知り得る貴重な資料である。畑作物は、大麦・小麦・こま・大豆・小豆・菜種・粒油・紅花・藍（慶応三年以来）・そば（明治四年以来）・たばこ（明治五年以来）・きび等である。このうち紅花の売上代は第6表のように、貨幣化される作物中の第一位を占めている。一反からの収穫量は干花にして約四貫匁であるから、畑矢家の紅花作付面積は約二反歩ぐらいと想像される。

畑作物それぞれの金額が、比較的良好に判明する慶応元年の分を例にとってみよう。大麦一三俵、小麦五俵（四両三分三朱）、菜種五匁（二〇両）、大豆二〇俵（一七両二分）・小豆四俵（三両二分）、紅花七七貫八五〇匁（二七両）である。大麦は自家販米用とされたためか単価は記されていない。また米はこの年は記していないが、この

一五年間は六一俵から八七俵の間を上下しており、平均七一俵余に当る。このうち、半分の約三〇俵前後が飯米である（慶応二年は三五俵、同三年は二七俵であつた）。したがって貢納米を差引いて一〇——二〇俵ぐらいの余剰米が出るとみられ、かりに平均して一五俵とみると約一五両余で、細矢家の貨幣取得は合計七七両三分三朱となる。このうち紅花は実に三四・六%に及んでいる。細矢家はこれらの商品作物の作付状況からみても分るように、この地方としては最も進んだ農業経営をやっている精農であるが、一般に紅花が農家経済にとって重要な地位を占めていることが指摘できるであろう。

また「谷柏村御用留帳」は、谷柏村（現山形市）名主半田源右衛門家の公用私用にわたる記録であるが、天保七年の「申年紅花摘直段付覧」は、同家の紅花収獲を明細に記している（第7表）。

この表のほかに干花一貫三百匁を二両一步で売っており、紅花総収入は二両一步三朱と九貫四七八文である。翌天保八年は、生花三九貫三〇〇匁の二九貫二二九文、干花三貫三〇〇匁の三両三分一朱である。またこの御用留帳の

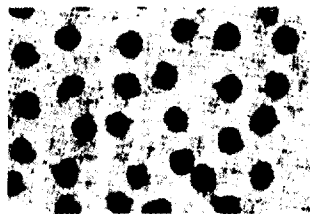
第7表 半田家紅花収獲高

摘 日	生花摘量	代 値
6月11日	180匁	144匁
12	600	540
13	570	570
13	540	540
14	1匁400	840
14	1 040	624
15	830	442
15	2 040	1匁122
16	430	245
16	2 600	3朱100
16	1 330	665
16	1 700	850
16	430	215
17	430	215
17	1 130	565
18	530	265
18	100	50
20	1 000	1匁000
21	40	16
21	330	330
23	80	40
24	200	100
計	17匁530匁	3朱9匁478文

天明六年の項には、次のようにある。「申十月、御尋二付乍<sup>レ</sup>恐奉<sup>二</sup>書上<sup>一</sup>候。一、畑七町七反九畝廿歩、内三町六反四畝歩程、紅花大豆作り申候。一、四町七反五畝廿歩程、大麦作り申候。苧取候跡荏油・菜・大根・蕎麦・



を出す面積のこと。以上きわめて僅かな例ではあるが、幕末期の紅花作りの普及の概況を知ることができる。したがって、「羽州の儀は雪国に付畑方一作二而困窮仕候得ども、紅花斗り二而取続罷有、別而紅花之儀は鹿地二而生立不<sup>レ</sup>宜候間、随分土地宜敷、御高免之畑地へ仕付、紅花一色の助成を以、是迄御年貢無<sup>レ</sup>滞上納仕来百姓渡世相送り申候」というのは、あながち誇張ではなかった。農村への貨幣経済の滲透を、生活の奢侈化の点から警戒した領主側も、紅花作りだけは格別として作付制限からはずしたばかりでなく、奨励さえしている。



上は農家の庭先にひろげられた紅餅を中心に働く男女、日傘をさした飴屋など花乾場風景（「紅花屏風」より）。左はむしろの上の紅餅。

長命草。右之通り耕作仕候。名主、組頭、百姓代」。これによって、谷柏村の七町余の畑のうち約半分は紅花を作り、その後作に大豆を作っていることがわかる。また安政二年に、天童織田藩が紅花専売を施行するに際し、領内農民に「紅花蒔付書上」を提出させている。北目村（現山辺町北垣）の場合は、百姓四五軒のうち二二軒が最高六俵場から最少一斗場まで、それぞれ蒔付けている。蒔付面積は総計三一俵二斗五升場で、一戸平均一俵一斗六升場余に当たっている（一俵場は年貢米一俵

これも農民経済の破綻を防ぎ、高率貢租を確保する必要からのものであることはいうまでもない。

さらに紅花の生産向上のため、生産・販売についての技術的な指導統制の積極的な面もみられる。もつともこの元文三年の例は、京都問屋からの要求によって地元<sup>の</sup>紅花仕入宿が藩に訴願したことによって行われたものであるが、藩の産業政策の一端を示すものとみてよい。元文三年五月、山形の十日町・七日町・八日町・横町・旅籠町の五町三二人の紅花仕入宿が、藩に紅花の摘方や売買方法について統制を訴願した。それは、京都紅問屋からの報告によると、近年、最上紅花は紅が少なく品質が低下し、仙台花に劣るようになったというが、その原因として次のような事情が考えられる。百姓は花が十分熟するのを待たず、未熟のうちに胞子もまじえて摘むので、その種子も劣悪となり草丈の成育も悪くなってきた。また茎曲りや虫付きが多くなり、そのため近年は時付面積が増しているにもかかわらず、産額が低下して駄数が減じてきたのである。それで今回は藩の厳命をもって達してもらいたいと、次のような事項をあげている。

- 一、未熟花を無理に摘まないこと。よく熟した摘期に、しかも朝露のあるうち、おそくも四ツ時（午前十時）限りに摘みあげること。
- 二、胞子の多い未熟花の上に、上花をかぶせる<sup>きせ</sup>花はしないこと。
- 三、百姓は午前十時に花摘を終え、花市場は正午から暮時までとし、夜間営業は禁止すること。夜中に及ぶと品物を粗末に扱い、品質を下げるようになる。
- 四、紅花仕入宿は、百姓から生花では買わないこと。仲買が生花を買集めて玉に仕上げたのが従来の仕来りであるが、問屋が直接に生花を大量に買入れたのでは、仕上げが粗末になつて質が低下する。
- 五、仲買（さんべ）どもが、置花<sup>しけ</sup>をすることを禁止すること。雨花を一夜囲つておいて翌日の摘花にまぜて売ると、花腐りができて他の良質の花も粗悪品となる。

以上の五項に、要約できる内容である。この歎願に対し、藩は「右願の趣大小之百姓並名子水吞寺社門前の者

迄令ニ披見「前書之通相心得可ニ罷有ニ者也」と受理し、布達している。これは仕入宿や荷主問屋の主導のうえに、藩が下命したものであるが、藩権力に依存・連繫する荷主問屋の特権的性格も露呈されている。

### 集荷販

荷問屋の手先となつて生産者から直接買集める仲買を、目早あるいはさんべといった。目早は紅花に

### 売機構

かざらず蠟・漆・油・青亭などの地方産物を、問屋商人の資本を預つて買集めるもので、山形領内だけで天明頃には約五〇人ぐらいいたようである。「近在近郷へ走廻諸品の高下を見分売買口目早見出」すところから、この仲買渡世の者を目早と称するようになったといわれる。享保十六年山形領主堀田相模守の時代に目早仲間を結成し、口銭・冥加・議定等を定めている。口銭の歩合はこれまでは定めてなく、「売買向働次第」に「太儀料」として受取る慣例であつたが、このとき以来紅花一駄に付売人・買人の双方から金一分ずつ計二分と定められた。冥加は口銭の四分の一であつた。議定は一六カ条からなつており、主なる取決めは次のようなものであつた。

一、公儀の法度を、堅く守ること。

二、目早渡世の者は、商人の仲立をして大金を預る商売であるから、龜忽のないよう正直第一に心掛けること。

三、商人から預つた手附金、取引金等で不正をなした場合は、仲間から除くこと。

四、売買の商人衆へ、乗合商は禁制である。

五、口銭は、すべて現金で貰い上げる。

六、商取組の際、先に参つた仲間の者があれば、その用の済まないうちに自己の商談をきり出してはならないこと。

七、株式譲渡に際しては、仲間の内に一人でも不承知の者があれば許可しないこと。

八、年々世話方へ、筆墨紙料を差出すこと。

その外博打、賭勝負の禁止、寄合に遅刻しないことなどがある。とくに商取引については嚴重で、違反があれば仲間評議に及ばず除名することを規定している。以上によって目早の機能と商慣習が一応理解できよう。

これらの目早から、或いは直接手代等をもって集荷し、京都や江戸に出荷した荷主問屋は山形に最も多く、これにつぐのは谷地である。ほかに寒河江・天童・楯岡に数家ずつあり、また村方にも小荷主から大蔵の稲村のような豪商にいたるまで散在した。尾花沢の俳人鈴木清風のような、特異な豪商も存在した。山形では吉野屋渡辺吉兵衛・大屋佐藤利兵衛・佐藤利右衛門・福島屋治助・井筒屋榎森家・村居清七・大黒屋長谷川長吉・長谷川吉郎次・長谷川吉内・市村小二郎・市村半三郎・足利屋牧谷新兵衛・六沢屋草刈新兵衛・叶屋叶内長兵衛・三浦屋権四郎・井筒屋浜村伊惣治・山口屋米蔵・富士屋渡辺近七・竹原屋五十嵐家・槌屋丹野孝次郎・紅屋江川家・紅屋久太郎・槌屋勘右衛門・高島屋藤左衛門・鈴木彦兵衛・高橋伊兵衛・西谷金兵衛・伊藤茂右衛門・柴崎善兵衛・岩瀬屋太惣治・木綿屋嘉兵衛・石塚庄七・笹川長六・米沢屋勘兵衛らがあげられる。ほかに資料に散見するものに大沼養之丞・西村清左衛門・伊勢屋理右衛門・高橋五右衛門・井上九兵衛・麻屋安二郎・小林藤右衛門・大沼正七・藤屋伝吉・加茂庄十郎・二藤部兵右衛門（大石田）・桜井屋源兵衛・渡辺喜助（大石田）・有井四郎治らがある。

谷地方面では和泉屋楨藤左衛門・柴田弥右衛門・堀米四郎兵衛・逸見庄左衛門・宇野仁左衛門・本木林兵衛・鹿野武右衛門・丸屋長吉らが有力なもので、ほかにも小荷主は多くあったようである。寒河江方面では中村七兵衛（現千原家）・安達屋又三郎・丹野三九郎（皿沼）らがある。天童では工藤六兵衛・仲野半四郎・青柳清兵衛、楯岡では伊藤仁八のほか、いまのところ調査が行きとどいていないので判然としない。

これらの紅花荷主は、一般には都市の商業資本家であるが、谷地方面や在方のは商人高利貸地主と規定されるべきものが多い。高利貸機能によって資本を蓄積し、さらに質地取り地主として成長をとげ、その大資本をもって特産品の中央市場出荷の流通経済に参画するにいたったものとみられる。山形では、小商人から高利貸などに

よって荷主問屋まで成長した地生いの商人と、近江や伊勢・足利などから移住し、早くから特産品の局地間商業にたずさわって発展したものと、二つの系譜がみられる。井筒屋浜村家と村居清七家は江州薩摩村出身の兄弟を先祖としており、寒河江の中村家は伊勢松坂商人の土着したものである。これらの問屋はもちろん紅花だけを専門に扱ったものではなく、青芋・蠟・漆・絹糸・油など広く取扱っているのが一般である。それらを三都市場に出荷すると共に、帰り荷として地方の生活用品を購入し、卸売・小売を営むもので、局地間商業と局地内商業の両面の機能をあわせものが普通であつた。あるいは、酒・酢・醤油・味噌等の醸造業や油しぼり等を兼営するものもあつた。

### 商品生産

羽州村山郡地方はこれまで述べてきたように、紅花・青芋を主とする特産品の生産地帯として特色と地主制 づけられるとともに、近世後期において地主・小作関係の早期的発展をとげたことでも、いちじるしい特徴をみせている。その点村山地方は後進地帯のなかにありながら、中間地帯的特色をもつものともみられよう。ところで特産商品の生産・流通と地主制の発達の二つの特色を、早急にかつ安易に結びつけて理解することはお警戒を要するであろう。それを帰結することは幾多の精密な論証の過程を必要とするが、いま概括的に指摘することができるのは次の諸点である。

一、特産商品の生産は農民の全階層に及んでいるとはみられないが、農村の貨幣経済を著しく進展させたことは否めない。

二、貨幣経済の滲透は（種々のケースはあるにしても）おのずから農民階層の分化を促したことも、各地の村落史料の調査から論証することができる。高利貸機能を営んだ有力農民はその副次的結果として質地取り地主へと転身し、やがては積極的に土地を対象に投資し、また買得して地主化への途をたどる。

第8表 土地集積状況(明治8年)

町	人数	町	人数
上 町	5人	諏訪町	2人
八 町	5	新百姓町	2
十 町	9	七日町	5
鉄 町	2	北肴町	5
五 町	5	横 町	3
二 町	3	六 町	1
三 町	3	皆川町	1
旅 町	3	四日町	1
蠟 町	1	下条町	9
塗 町	1		

(山形市内における立付米 100 俵以上の地主数、明治8年立付米調査による)

三、それらの村方地主から寄生地主への成長過程における高利貸機能は、小口の村内農民相手ばかりではなく、都市商人への大口投資がより有利なものとして活発となる。

四、また高利貸的村方地主は、多くは企業性に富んでおり、自ら小商品生産者として進歩的経営を営むばかりでなく、仲買もしくは荷主として生産・流通の掌握にのりだしてくるのが多くみられる。しかも生産農民への前貸形態をとるとき、高利貸商人地主の発展は一層急速にかつ有利確実に予約された。こうしたケースは平百姓からの例も見いだせるし、また近世初頭以来村役についていた土豪ないしは武士的系譜のものにもみられる。

五、次に特産品の流通面で最も大きく活動するのは、都市商人である。これもたんに店舗営業ばかりでなく、殆んどが武士・町人から荷主問屋・近在農民にいたるまで広範囲にわたる高利貸業を営んでいる。そればかりでなく検断・総町取締その他の町役人として、或は冥加・御用金等を通じて藩権力に結びつき、依存していることも見のがし得ない。これら都市商業資本も前貸的金融ないしは手代・仲買を通じて商品を掌握し、荷問屋を営む

とともに帰り荷の卸売小売の機能を活発にしている。そしてその副次的結果として土地の集積がもたらされ、さらには安定度のより高い投資として積極的に土地集積に努力するに至る。そうした地主制の進展の背後には、余剰分を取得し得るほどの生産力の上昇と、地主的所有を実質的に承認する領主権力の後退があることはいうまでもない。明治八年の立付米調査によつて判明する、山形商業資本の土地集積の状況は第8表の通りである。

これらをすべて純然たる商業資本による土地集積とはみられない

いし、またこれらの多くは一〇〇俵から三〇〇俵台で過大視するほどでもない。しかし最も有力な特産品商業資本である長谷川吉郎次は一〇九九俵余、村居清七は一三五八俵余で、山形市内での最高であるばかりか当時県内でも有数の大土地所有者で、しかも純然たる都市商業資本であるところに特色がある。幕末以来、早く土地への投資に歩みつつあった特産品商業資本として、注目しておきたい。

またこれらの資本が、明治以後は銀行資本として、あるいは地方産業資本として、多様な変化をみせつつ停滞性・後進性のなかにも近代化への起動力となったことは、追究されなければならない課題であろう。

要するに、特産商品の生産流通の一因のみに帰することはできないが、村山地方の地主——小作関係の早期的かつ顕著な展開は、直接間接にそれとの関連を除いては理解し得ないものであらう。

### 京都紅花問屋設立問題

紅花生産の向上いちじるしい享保末年から、流通機構の変化——京都紅花問屋仲間の設立——をめぐって、生産地商人と京都問屋との深刻な長期にわたる紛争がひきおこされた。享保二十四年四月京都東町奉行からの示達によって、今後は紅花問屋一四軒、紅粉屋（紅染屋）一四八軒を指定し、京都入荷の紅花荷は一四軒の問屋のみが取扱うこととした。問屋は手代衆を直接生産地に下して買い競うことをしないとにも、紅粉屋は必ず問屋からのみ購入し、生産地荷主との直取引を禁止するというものであった。これは紅粉屋を職人として流通過程から締め出し、問屋が売買の独占を確保するばかりでなく、問屋間の競争を排除して問屋利潤の増大をはかろうとするもので、問屋側の一方的策動によって施行されたものであることは明白であった。従来株仲間としては問屋・紅粉屋を含めて稲荷講という組織が、たとえば実態は親睦を旨とするものに過ぎなかったといえ、仲間外への売買禁止、売掛代金の決済にかかわる紛争の解決法等の規定をもって、以前から結成されていたのである。従って享保二十年の問屋指定は、たんに株仲間の強化というよりは流通過程における利潤の配



荷問屋の荷造り風景：旦那が采配をふり、若衆が荷造り、手代が商標屋号を書く。8貫目1捆、4捆を1駄にして大石田河岸まで馬で運ぶ（「紅花屏風」より）。

残り問屋が支払うべきであると、一四軒問屋の連帯責任を追及する荷主の交渉にも、一向に応じない。こうした状態に荷主たちも黙し得ず、元文五年になって最上商人惣代が京都奉行に問屋設立後の横暴をつぶさに述べ、問屋廃止を強力に提訴したのである。その要求の主要な点は次のようなものであった。

一、紅花売買については、白地取引に致したい。白地取引とは売人（荷主）と買人（紅粉屋）が問屋立会の上、相対で値段その他の商取引をし、問屋には先例通り古銀三〇匁の割で口銭を支払う方法である。また委託販売の場合は、問屋から荷主への仕切状に売

分を問屋のみが独占しようとする、より強力な措置であった。その結果は直ちに生産地荷主商人の、ひいては生産者の大きな利潤の低下となってあらわれた。すなわち値段相場は全く問屋側が一方的に決定することとなり、紅花値段は急落した。しかも問屋は生産地からは安く買取り、紅粉屋には高く売付けるといふ、従来の一定の口銭を受取る問屋機能から発展して新しい利得の途を開いたのである。遠隔地方荷主からの委託販売によって、口銭を収める純粹の荷受問屋から、荷主から荷物を買取って損益を自己の責任に負って営む仕切込問屋への変質であった。このような機能を独占的に握れば、さらに悪質な手段もおのずから講ぜられるようになる。すなわち年々或る問屋がつぶれたと称して、買代銀を支払わないのである。一問屋がつぶれたら



先名を明記して、売人買人を明瞭にすることである。つまり仕切込問屋としての機能を封じて、以前のように荷受問屋としてとするのが第一の要求点であった。

二、紅粉屋や問屋の潰れと称するのを防ぐため、最上商人を代表する出店を京都に設けて、商取引を監視すること。

三、問屋は一四軒に限らず、今後新規加入を望むものがあつたら勝手次第に許可すること。

これらの要求は、享保二十年の問屋設立の意図を全く拒否しようとするものであつたから、問屋側はもちろんその背後権力である京都町奉行は、まともにこれを取上げようとはしなかった。元文五年六月以来、十月、十二月と三度に及ぶ訴願も却下され、十二月二十一日には京都所司代に箱訴を決定している。この訴願運動を強靱に展開したのは、いうまでもなく最上地方の荷主商人であるが、その背後の農民の積極的な動きはまだみることができない。紅粉屋にしても翌寛保元年に所司代の求めに應じて、相対売買が諸事明白になつて宜しいと、荷主側の要求に消極的な賛意を表しているに過ぎない。問屋の支配下にある弱い立場の紅粉屋としては、彼等の意向を強力に押出すことは控えられたのであろう。ところで最上商人代表というが、何れも谷地寒河江方面の商人であつて、有力な山形商人は全く名を出していない。また山形商人の側には、この訴願に立ち上つた動静がみられない。したがつてこれは、谷地寒河江方面の在郷商人的色彩の濃厚な仲買荷主商人だけの立ち上りではなかつたかと思われる。もしそうだとすれば、この相違を産み出した基盤の相違が重要な一視点となる。生産者農民との直接的連繋の稀薄な、すでに確立した都市商人としての前期資本的性格と、生産者農民の利益と直結している半農的な郷仲買荷主との立場の相違が、然らしめたものかと考えられる。いずれにせよこの訴願運動は、問屋の専売権を幾分弱めた程度の成果を得たのみで、寛保元年の六月になつて満一年に及ぶ運動を停止した。

その後京都一四軒問屋は、仕切込問屋としての機能を一層強化していったようである。そのため荷主側との紛争は絶えることがなく、宝暦二年になつてまたまた荷主側は訴願に立ち上ることになった。此度は正面から問屋

の独占権解除を掲げず、新たな手段でそれを実質的に獲得しようとしている。一派のものは、最上商人の手によって京都に紅花売買会所を建てることを要求し、また他方では大坂に紅花問屋を設立して京都問屋をたな上げしようとする動きもあった。あるいは休み問屋の株を最上商人が譲りうけて新問屋を営みたいとか、さらには京都・大坂合せて二〇軒問屋を許可してもらいたいか、それぞれさまざまな要求を掲げている。この宝暦二年から十年にわたる第二期の運動も、幕府権力と結ぶ問屋方の強硬な反対によって、何らの実効も収め得ないで終った。しかしこの期の運動には、先回と異なった動向があることは注目される。それは一には生産者農民の代表と目される名主らが立ち上っている点、二にはその範圍が山形周辺まで拡大していることである。

宝暦前期の運動もこうして潰れ去ったが、谷地を中心とする最上商人の執拗な抵抗は、依然として継続されていた。その間の経過を示す資料は甚だ不十分であるが、宝暦末年から明和にかけて第三期の運動が展開された。どのような手段が効を奏したもののか、またどのような経済上・政治上の転回を表示するものか今は明確にし得ないのであるが、明和二年七月になって「取計不<sub>レ</sub>宜趣相聞候ニ付再応遂ニ吟味<sub>一</sub>」げた結果、京都一四軒問屋の廃止が宣告されたのである。「当年紅花問屋一四軒御取上げに罷成、古来之通三拾年余已前之通紅花出生之国々へ直下り相成候様に、紅花最上荷主相方へ小野田日向守様より被<sub>レ</sub>為ニ仰付一候ニ付大勢郡中の百姓悦申事二候」(大町念仏講帳)と、三〇数年間たたかい続けて得た喜びを記している。はたして翌明和三年になると「当年京都より紅屋並に問屋老両人山形直買に下り申候。依<sub>レ</sub>之百姓方甚氣つよく有之、直段高直仕候」という状況を呈した。

### 紅花の藩

#### 専売制

羽州村山地方の第一の特産品である紅花に対して領主経済のための吸収策として、ことに経済的後進地帯に特徴的な政策である強力な藩専売制が実施されなかったのはなぜであろうか。村山地方の

中心部を押える山形藩は、先にも言及したように領主の交替がはげしく、商品生産を確実に掌握する政策を展開するまでのゆとりと力を持ち得なかったことがその一因とみられる。それだけ、地方に対する藩権力の弱さを示すものであろう。ただ強化二年に山形領主となった水野家は、翌三年頃紅花専売の問題をとりあげて検討している。けれども結局は、荷主問屋と仲買目早によつて、緊密に構成されている既存の流通機構を変革する自信をもち得ず沙汰止みとなった。「元方荷主御用達は……何れも相応之富家ニ御座候。御領主之御威光ニ而も容易に変革相成兼候事と奉<sub>レ</sub>存候」と藩権力の弱小さを認めざるを得なかった。そしていろいろの角度から事情を考察した結果、「彼等（荷主・御用達）の利潤相増候ハ矢張御領主の御蔵へ実候道理ト奉<sub>レ</sub>存候」というところに落着いたのである。専売制施行を断念した水野藩は、有力な元方荷主で、もともとから御用達を勤めていた富商八名（村居清七・長谷川吉郎次・長谷川吉内・佐藤理兵衛・福島治助・佐藤久太郎・佐藤利右衛門・三浦権四郎）のほかに、新たに四一名の臨時御用達を全領内にわたつて任命し、その面から彼らの力を利用する方策を講じている。これらの御用達は何れも有力な荷主問屋・富商・或いは高利貸商人地主で、この地方の経済を支配していた基盤的勢力である。水野藩としては、入部早々これらの勢力と対立するよりは、彼らの存立を容認し、これと連繫するのが得策であつたろう。

山形水野藩にして実施し得なかつた紅花専売を、僅か二万三千石余の天童織田藩が実施に踏み切つたことは、注目すべき唯一つの例である。安政二年に領内に布達して、他領商人への売払を禁止し、江戸大伝馬町問屋頭取馬込勘解由に一手販売をすることとした。この頃はちょうど諸問屋再興後の整理期で、江戸の紅問屋では元組・仮組の対立から激しい紛争が続けられていた。これに上方問屋と江戸問屋の生産地における対立もからまり、幕末の産業新統制の氣運に乗じて、かろうじて成立したという複雑ないきさつをもっている。藩は百姓に紅花蒔付

面積の書上を提出させ、国産方御用掛頭取・添役等を任命し、大庄屋・名主らを督励して生産販売の取締にあたつたが、はたしてどの程度実現されたか疑問である。同年の秋十月には、御用掛の一人である工藤六兵衛は、「故障の筋有<sup>レ</sup>之」というはっきりしない理由で、小姓格一五人扶持を返上し、国産方頭取を極力辞任しようとしている。工藤家は代々京都筋と取引ある紅花商であつたし、江戸問屋と結ぶ藩専売は明らかに不利な変更であつたことは想像できる。その後の成行は明らかではないが、これらのいきさつからみて恐らくは永続もせず、効果もあげ得なかつたのではないかとみられる。村山地方は小藩分立による藩権力の弱化、藩領の分散性による統制の困難等の理由に加えて、今更統制の枠内に押えることは不可能な状態であつたほど、紅花の流通機構は確立していた。なお、幕末という幕藩体制の崩壊期の時代的背景も、考慮されるべき条件であろう。

## 参 考 文 献

米沢藩専売制度関係史料（米沢図書館蔵）

「西村家由緒書」・「諸役場根元記」・「笹野通夜物語」・「青亭奏議一件」・「信夫目安」・「青亭御弘大概」・「定法書」・「石田名助記録」・「邑鑑」

横山昭男「米沢藩における青亭専売制の成立」（『歴史の研究』七）

北条郷青亭騒動に関する史料

「沖郷村史」・「東置賜郡史」・「森平右衛門事蹟」（米沢図書館蔵）。事件の主謀者である四郎兵衛の回顧記「破願雜行」（和郷村大滝哲氏蔵）。

伊豆田忠悦「米沢藩における寛政改革」（『史潮』五四号）

青亭小宿一件に関する史料

米沢方——「鷹山公偉蹟録」・「鷹山公世紀」

越後方——「十日町織物同業組合史」

米沢織に関する史料

「米沢市史」

星野順一「米沢藩の家中工業」(『米沢有為会雑誌』、昭和九年一月号)  
紅花に関する史料

長井政太郎「大石田町史」

伊豆田忠悦「東北後進地帯における在方荷主の形態と商品生産」(『社会経済史学』第二二卷三号)

平清水清所蔵史料「乍恐以口上書願上候御事」

天童市山口、阿部孝吉氏所蔵文書

榎本宗次「俳人鈴木清風の豪農的側面」(『日本歴史』六九)

永井秀夫「地租改正と寄生地主制」(『地租改正の研究』所収、東京大学出版会)

安孫子麟「幕末における地主制形成の前提」(『明治維新と地主制』所収)

今田信一「谷地町誌資料編」中の「生産者並問屋の論争」

安孫子麟「江戸中期における商品流通をめぐる対抗」(『経済学』三二号)

「山形経済志料」

「水野家文書」(東京都立大学図書館蔵)

伊豆田忠悦「紅問屋再興と羽州織田藩の紅花専売仕法」(『地方史研究』八の二)

今田信一「最上紅花史料」